

『わたしを離さないで』における語りの技法

——カズオ・イシグロ小論

安藤和弘

イシグロのテキストは緻密に構成されているということは、多くの批評家が指摘するところである。実際、長篇最新作のこの作品にかぎらず、初期の作品群に始まり、一貫して、それは、この作家について言えることである。ただし、「緻密さ」というのは、言うまでもなく、様々なかたちを取りえるものであり、作家としては総じてそのようなものを重視する傾向があるという指摘をするだけでは、特にイシグロという作家の場合、批評としては不十分である。個別の作品を精読し、それぞれの作品において緻密さが具体的にどのような技法のかたちを取っているかの検証にまで踏み込むことを、イシグロ文学は強く求めるような文学であるからだ。本論では、『わたしを離さないで』⁽¹⁾の主人公かつ一人称の語り手キャシー・Hが物語を組み立てる上で使っている語りの技法を調査し、分析を加えた上で、得られる所見に基づいていかなる作品解釈が可能であるかを考察する。

まずは、キャシーが、親友ルースとトミーと自分じしんの三人のあいだで、友情と恋愛という、重なり合いもすれば背反もする二つの関係のありかたが交錯した経緯を、どのように描いているかを見直してみる。そこに、キャシーが物語全体を構成する上で使っている重要な手法を、一つ見て取ることができるからである。それは、一見したところ一つに見える物語に二つの物語を織り込む手法である。幼馴染の親友どうしで三人はあり、特にキャシーとトミーは幼い頃から仲が良かったが、思春期頃からルースとトミーが恋人どうしとして親密になり、キャシーは、それ以後は、恋心

をトミーに抱きながらも、二人を親友という立場から見守り、ルースが「使命を終える」と、彼女の遺志もあって、トミーとようやく結ばれる、という物語がまずある。それは、キャシーが読者にそう読んでほしい物語だと言って差し支えなからう。その物語によれば、ルースとキャシーは、性格や物事についての考えかたがかなり違うのに加えて、トミーをめぐるライヴァル関係にもあるので、諍いもあるにはあるが、二人を結びつける強い友情の絆は最後まで壊れることなく、ルースの死後も、キャシーの心の中では、その友情の記憶は大切に抱かれ続ける。そして、トミーの死後は、キャシーにとっては、三人のかけがえのない友情の記憶だけが残り、ということになる。

だが、それと似ているようで実はかなり違うもう一つの物語を、キャシーは同時にしているとも言える。その二つ目の物語とは、隠された意外な物語というわけではない。出来事レヴェルでは、上の物語と違うところはない。違うのは、キャシーがルースを、自分とルースの関係を、どう見ていたかという点だけである。一言で言えば、キャシーはルースを親友と思ってはいたが、同時に、少なくとも彼女を好いていたのと同程度、彼女を憎んでもいた。ルースはトミーの恋人としては不足があり、彼に本当にふさわしいのは自分のほうだという思いから生じる憎しみを、キャシーは抱いていた。友情と憎しみは並存していてもおかしくはないし、そのことをキャシーは隠してはいない。ルースとの穏やかではないやり取りの場面を、キャシーは何度も描いている。しかし、キャシーがルースに対して抱いている否定的な感情は、それにもかかわらず、読者の記憶には明確に残らない。それは、多分に、キャシーが使っているある語りの技法のためと思われる。ルースに向かって怒りなり憎しみをを感じたと思いき出来事を語った直後のキャシーの語り口には、一定の傾向がある。例えば、ノーフォークへのルースの「ポシブル」さがしの旅の出だしのところで、キャシーは後部座席の真ん中に自分とトミーを分断するように陣取り、前にいる先輩たちとばかり話をするルースに対して、いたく苛立ちをおぼえる

場面。休憩のために車を先輩のロドニーが止めて、ルースが野原に一人で立ったとき、キャシーは彼女に歩み寄り、自分の不満を伝える。ルースがたちどころに腹を立てると、キャシーは、納得がいく返答などもらっていないのに、すぐに身を引いて、ルースの一見理不尽な行動の動機を、彼女に代わって考えてやるということをする。ルースは、トミーと自分の利益も考えて、三人を代表して振舞っているのであろう、と。要するに、キャシーは、ルースを、自分の頭の中で率先して弁護するのだ。キャシーの説明には説得力があるので、この場面の一連の流れの読まれかたは、諍いが起こったものの、キャシーが友情の深さゆえに良心的に問題を解決した、という具合になる。

キャシーがおそらくは物語中で最も強くルースへの反発を見せる場面、コテージ時代の最後の頃、教会墓地で、ルースが、トミーの面前で、彼とキャシーが言わばぐるになって彼の「展示館説」を自分に隠していたことに怒り、痛烈にキャシーをなじる場面も、その直後のキャシーの語りが生む効果が同様であるので、見ておく。反撃はせずに、一人その場を立ち去るときのキャシーの動揺と憤怒は相当なものであり、自分の感情に関するかぎり非常に抑制が効いた言葉遣いをする彼女にしては珍しい強烈さで、まずは怒りが表現される。

……後ろを向き、来たときと同じ小道を引き返しました。墓石の前を通り、低い木の門に向かって歩きました。しばらくは、大勝利を博したときのような昂揚感がありました。二人だけで顔を突き合わせて、どうぞお好きなように。何があったって知らない。いい気味だわ……。 (p. 302)⁽²⁾

その直後、次章の冒頭で、キャシーは、この出来事は、確かに後から振り返ってみれば三人の命運において大きな転換点であったとは認めながらも、その責任をルースに帰することはせず、抗えぬ外力（「強い潮の流れ」

(p.303) が引き起こしたものであったと言う。そのときのキャシーの口調は、それまでの三人の友情の絆の強さを強調するものとなっている。怒りの対象は明らかにルースであったにもかかわらず、それへの言及はない。なぜこの出来事が起こるに至ったのかについて一応の説明をしつつ、仲良し三人組というモチーフを持ち出し、読者の目線をルース個人から逸らすことによって、キャシーはルースをそれとなく免責しているのである。結果的に、破局を導くかとも思われたこの墓地の場面でのキャシーの怒りは相殺されるかたちとなり、それどころか、友情で結ばれた三人の結束力のほうが、読者の心には焼きつけられる。読者にとってはキャシーとルースの敵対関係が骨抜きにされるような語り口を、キャシーはここでも採用しているのである。

何か二人のあいだで悶着が起こったとき、キャシーはしばしばその直後に、それを相殺するようなことを言う。そのために、キャシーはルースに対してかなりな敵対意識を持っていたということに、読者の意識は容易には向かない。そのように仕掛けているのは、もちろん、語り手であるキャシーじしんである。なぜ、彼女がそのような語り口を常套とするのかは後で考察するとして、その前に、彼女がルースをトミーへの愛情という点で信用しておらず、ゆえに終始、彼女の言葉が表面上伝える以上に、実は彼女はルースへの敵対心を強く持っていたと解釈できる根拠を確認しておきたい。ルースが、なぜ、トミーを「カップル」の相手に選んだのかという問いを立てて、答えをさがしてみると、キャシーが彼を気に入っていたからという以外に理由を見つけることは難しい^③。実際、後年、ルースじしんが、本来カップルになるべきだったのはキャシーとトミーであって、自分は邪魔に入ったのだと認めている。キャシーが物語の冒頭で回想するヘールシャム時代からの最初のエピソードにおいては、男の子たちの中で孤立するトミーへのキャシーの気遣いは見て取れても、ルースが彼を好いていたと思わせる記述は皆無である。それどころか、ルースはトミーを「ばかなやつ」(p.16)と呼んでいる。その後も、ヘールシャム時代の最後の

年まで、ルースがトミーに特に心を寄せていたことを示す明確な記述はない。二人が特別な関係にあることをキャシーが読者に知らせる記述は、かなり突然に出て来る。16歳のヘルシヤムでの最後の夏に、トミーは非常に情緒が不安定であって、その原因は何であったのかを思い出そうとしているとき、キャシーは、まず「トミーとルースの破局」(p.144)という謎めいた前置きをした上で、「……その頃まで、二人は六ヶ月ほども付き合っていたでしょうか。少なくともそのくらいの期間は「公」のカップルでした」(p.147)とさりと言う。その直後のキャシーの語りは、その歳にもなれば思春期にもう既に入っており、生徒たちは、性に大いに関心があったが、保護官たちが性行為を奨励しているのかどうか判然としないため、混乱していたという話に脱線していく。その頃は、誰もが異性とカップルの関係に入ることに忙しかつたので、ルースとトミーがそのような関係に入ったことには特別な意味はないとでも言わんばかりの口調を、そのあたりの語りではキャシーは採用している。また、生徒たちにとっては、性行為は、まずはそれじたいのためのものであって、愛情が伴う必要があるものとは捉えられていなかったということも、確認しておきたい。それも、ルースとトミーの関係にはさほど特別な意味があるわけではないという印象を、読者に与えるはずだからである。総じて、キャシーは、物語のどこでも明言はしていないが、ルースとトミーの関係は、根底では、機械的な性行為に基づくものと考えている節がある。二人の関係は所詮そのようなものであり、更に、ルースがトミーを選んだ理由はキャシーの邪魔をするためであったとキャシーは考えていると仮定すれば、彼女のルースへの憎しみは相当なものであろうと想像できる。

ルースとトミーがカップルになったという、キャシーにとっては衝撃であったはずの出来事を、大したことが起こったわけではなかったと読者に感じさせるような口調で語るときに、彼女が使っている技法は複数ある。そのいずれも後でまた触れることになるが、とりあえずは、概要を指摘しておく。まず、この章(第8章)の初めから、話題が、キャシーが偶然目

撃した、何かの書類を鉛筆で真っ黒に猛然と塗りつぶすというルーシー先生の不可解な行動と、それがトミーの情緒不安定と関係がある可能性に設定されているところへ、キャシーは、それとの関連で触れておかねばならないという口実の下に、ルースとトミーのカップル関係の話題を切り出していること。ある大事な話題を立ち上げ、読者の関心をそれに強く引きつけておいた上で、そこに別の話題を挟み込むと、二つ目の話題のほうは、抵抗なく読者は吸収してしまうという技法である。これは、実は、キャシーが既に、エミリ先生が授業で使っているのではないかと勘ぐって、読者に紹介してある技法とほぼ同型である。

いま思い出すのは、本格的な性教育が始まったときのことです。確かに、どの保護官も性と提供をないまぜにして話す傾向がありました。当時、わたしたちは十三歳くらい。ちょうど性について心配したり、わくわくしたりする年齢ですから、ほかの話を添えられても、そちらのほうは上の空だったでしょう。保護官が性の話題にかこつけて、わたしたちの将来の重大事をこっそり語っていた可能性もないではありません。(pp.129-30)

トミーのことをいつも気遣っているキャシーにとっては、彼の情緒不安定は非常に重要な案件であり、それにどうも深く関わっているらしいルーシー先生の言動も、彼女にとっては、このとき、とても大きな案件として立ち上がっていた。まずそれらへ読者の意識を引きつけておいて、キャシーは、「こっそり」とそこへルースとトミーの性関係の話を持ち込んでいるという構造が、ここにはある。

既に指摘をした、ルースとのあいだで対立が生じたときに、それを相殺するようなことを直後に言うという、キャシーの語りに一貫してあるパターンのヴァリエーションを、ここに見て取ることもできる。キャシーは明言していないが、ルースがトミーとカップル関係にあるというのは、即

ち、キャシーとルースはライヴァル関係に入るということである。なので、その話題に触れれば、自然と彼女の語りには緊張感が走ってしまう。彼女としては、それは読者には感知されたくない波長であるので、上で見たように、直ちに、生徒たちにとっての性という一般的な話に話題を切り替えることで、その緊張感を骨抜きにするということをする。この技法を用いることでキャシーが狙う効果は、読者の視線を二人のライヴァル関係から逸らすことに他ならない。三つ目の技法は、「……その頃まで、二人は六ヶ月ほども付き合っていたでしょうか。少なくともそのくらいの期間は「公」のカップルでした」とキャシーが言うときの、言わば「報告の遅れ」である。彼女がルースとトミーがカップルになったことを読者に初めて伝えるときに、なぜ、「六ヶ月」がもう過ぎてしまっているのか。なぜ、二人がカップルになった当初の話は省略して、二人のあいだにひびが入りかけている段階から話を始めるのか。ある新しい話題を切り出すとき、例えばそれがある出来事である場合、その「始まり」について触れることなく、「その後」から話を始める。これは、キャシーが頻繁に用いる技法である。この技法が狙う効果は、それが用いられている個別の場面ではあまり明確には定まらず、作品全体を見渡したときによりはっきりと見えてくる性質のものであり、そのことについては後で検討をするが、とりあえず、この場面でどういう効果が生じているかを考えてみるならば、どうしてそのような経緯になったのかは考えてもさほどの意味はない、という印象を読者に与えるといったところであろうか。

キャシーは二つの物語を実はしているという論点に戻ろう。その二つの物語のおよその姿は既に見たとおりだが、その相関関係はいかなるものであるか。一方で、キャシーは、親友二人を、最近、相次いで失い、自分も間近に介護人を辞めて休息をする予定である今、大切な二人の記憶を心に刻み込むために、「親友三人の友情物語」とでも呼ぶべき物語をしている。しかし、それは、「友情」や「記憶」といった、読者にとっては読んで心地良いカテゴリーに焦点を合わせればそう読めるという程度の物語だ

という次元がある。そこにおいては、別の物語がそれに併走している。そのもう一つの物語においては、案件となるのは、「友情」や「記憶」といった麻酔のように心地良いカテゴリーではない。少々誇張を覚悟の上で整理をすると、そのもう一つの物語の観点からすれば、一つ目の物語は、煙幕を張るためのでっち上げ物語にすぎない。二つ目の物語において、では、何が案件になるのかと言えば、まずは、キャシーの、彼女じしんの淡々とした言葉遣いからは想像もできないような、トミーへのあまりにも切実な思い入れがある。物語を締める最後の象徴的な場面、トミーもルースも亡き今、特に用事があるわけでもないのにノーフォークへ車を回して、あれやこれやのゴミが風に吹かれて有刺鉄線に引っ掛かる風景を目の当りにしたとき、目を閉じて、それまでは禁欲的なほどに自らに空想を禁じてきた彼女が、ただの一回だけ彼女らしからぬことに「自分に甘えを許した」(p.438) 場面で見える幻影は、遠くから自分に向かって手を振るトミーの姿であって、そこにはルースはいない。確かに、三人の人生は密接に交錯し、そこには、親友どうしと呼んで良い関係があるにはあったが、最後の場面には、ルースの姿はない。この場面では、キャシーがそれまでピンと張ってきた語り手としての警戒心が緩んでいる節がある。それまで、心にはいつもありながら、語ることは控えてきたものが、この最後の場面で表出していると読むならば、第二の物語は、やはり、終始、伏流していたと考えざるをえない。

第二の物語は、明確な言葉では語られないため、その存在は読者に気づかれるのが遅い。三人の友情がいかに貴重なものであったかということばかりをキャシーは過剰なまでに繰り返す言うので、読者はそちらの物語を先に読んでしまう。読者はいずれは第二の物語の気配に薄々と気がつくかもしれないが、それは、必ず、キャシーによって第一の物語を読まされてしまったから後のことである。二つ目の物語は、一つ目の物語の後を追うかたちで、遅れて語られているのである。キャシーは、自分が語る物語がそのように読まれるように、実は、入念な工夫をし、いくつかの技法を凝

らしている。既に見ておいた、自分とルースとのあいだで対立が生じたときに、すぐさまその印象を和らげる効果を狙ってキャシーが使う技法は、すべて、大局的には、第二の物語の進行を遅らせるという目的のためにも使われていると考えて良い。キャシーにとって、第二の物語が第一の物語に追いつくことがないようにすることは、物語行為を継続するために、非常に重要なのである。その理由は、意外に単純だ。第二の物語は、それじたいでは語るができず、第一の物語に付随するかたちでしか語りえないような物語であるからだ。なぜかと言えば、第二の物語は、端的に、起こらなかったことについての物語だと言えるからである。起こらなかったこととは、キャシーとトミーの愛の成就である。上では、第二の物語とはキャシーのルースへの憎しみの物語であると書いたが、同じことである。それは、即ち、ついで成就しなかったキャシーとトミーの愛の物語だと言い換えて良い。

ルースとトミーがカップルであったコテージ時代までは、ルースの邪魔のために、キャシーとトミーが恋人どうしとして親密になることはなかった。ルースのポシブルさがしのノーフォークの海岸町クローマへの旅で、束の間ながら、キャシーはトミーと二人だけで、至福の時間を過ごしはした。昔、ヘールシャム時代、キャシーが大事にしていたが誰かに盗まれてしまったカセット・テープを、店を回って一緒にさがそうとトミーが提案したときである。そのとき抱いた喜びの気持ちを表現するキャシーの言葉は、自分の感情は総じて控えめに表現する彼女にしては例外的に直情的であり、喜びの深さが窺い知れる。

……これからテープ探しを始めようとしたあの瞬間、突然、世界の手触りが優しくなりました。一時間もの待ち時間に、あれ以上の過ごし方があったでしょうか。わたしは必死で自分を抑えました。そうしなければ、どうしようもなく笑い転げたり、小さな子供のように歩道を飛び跳ねたりしそうでしたから。(p.264)

だが、まずいことに、そのテープが本当に見つかってしまう。しかも、トミーではなくてキャシーが見つけてしまう。二人で一緒にさがしているものが見つかったのだから、二人ともさぞかし嬉しかっただろうと、読者はつい読んでしまう。そうではなかったと、はっきりとした言葉でキャシーが言っている箇所があるので、見ておく。

それまで、珍しいものがあるたびに歓声をあげていたわたしが、なぜかそのときだけは声が出ませんでした。嬉しいのかどうかもわからず、プラスチックケースを見つめたまま立ちすくみました。何かの間違いであってほしい、とさえ思いました。テープ探しという口実があったからこそ、この楽しい時間があります。見つけてしまったのは、それももう終わりではありませんか。歓声をあげなかったのは、そのせいだったかもしれません。一瞬、見なかったことにしようか、とも思いました。(p.265)

今、自分がしていることは、実は、別のことをするための「口実」にすぎないというのは、上で見た、キャシーの二つの物語の関係と同型であるが、それはさて措くとして、彼女にとっては、テープが見つかったことはまずいことだったことを確認しておく。更に、物語の終わり近くで、ノーフォークでのこのときの喜びを相殺する場面がある。キャシーとトミーが、「猶予」の可能性を求めて、リトルハンプトンにマダムを訪ねて行く場面である。海岸町にトミーと二人きりであるという点では、この場面はクローマでの場面の反復となっている。さがしているもの（猶予）があるという点でも同じだ。しかし、今度は、それが見つからない。今度はさがしているものが見つかったほうが良いのに、それが与えられることはなく終わる。この場面は、クローマでの場面の明らかな反転像であり、先行する場面のまずかった側面だけを事後的に照射する働きをしている。

しかし、それにしても、キャシーのトミーへの愛は、ルースの死後、彼

女が彼の介護人になった時点で、成就したと言えるのではないか。答えは否であろう。性行為の意味合いはクローン人間たちの世界においてはたかがのものであることは既に説明されているわけだし、キャシーじしんが、それは提供の猶予を申請するためのものでもあったなどと言っている。そして、何と言っても、最終的には、キャシーはトミーと訣別するのである。4度目の提供を控えて、猶予なるものは噂の域を出ないことが決定的に判明したとき、トミーの心境は変化し始める。マダムとエミリ先生との会談の直後、キングスフィールドへの帰り道、彼はキャシーに、正しいのはクローン人間の運命について真実を教えようとしたルーシー先生のほうで、嘘をついてでも生徒たちを保護しようとしたエミリ先生ではないと言うが、それを聞いたキャシーは危機感をおぼえる。「わたしの頭のどこかで警報を鳴らすものがありました」(p.417)。キャシーには、トミーにそのような考えかたをしてほしくない理由があり、トミーのこの発言は、彼女にとっては、実質上、彼女からの離反表明なのである。実際、その後、トミーはキャシーとのあいだに距離をとるようになり、キングスフィールドの回復センターの仲間の提供者たちのほうに同化していく。この期に及んでは、最後の覚悟、親友三人の物語をそろそろ終えなければならない覚悟ができつつあるキャシーは、自分から離れていくトミーを、もはや、引き止めようとするわけでもない。

以上がキャシーがしている二つ目の物語のおよその筋である。着目すべきは、この物語は、ルースの存在を抜きにしては語りえないということである。キャシーにトミーと別れる決心をさせるのは、ほぼ間違いなく次の彼の言葉だが、そこにもルースが大きく関与している。

「ルースならわかってくれたろう、提供者だったからな。おれと同じことを望んだかどうかは別として、わかってはくれたはずだ。あいつは最後の最後まで君に介護人をやってもらいたいと思ったかもしれんけど、おれが違うやり方をしたいと言っても、わかってくれたと思う。

キャス、君にはわからんこともあるんだ。提供者じゃないから……」
(p. 429)

提供者にしか分からない、まだ介護人をしているキャシーには分からないことがあると、以前、ルースはキャシーに言った。トミーのこの発言にキャシーが打ちのめされてしまう理由は、彼が自分と彼女の立場と経験の違いを根拠に、二人のあいだにある溝を指摘しているからではない。そうではなくて、その線引きをした上で、トミーがルースを引き合いに出し、自分をルースの側に置いているからである。この直後、キャシーはトミーの介護人を辞め、物語もあっけなく終わってしまう。ルースは、このように、死後もキャシーとトミーの関係に介入し続け、物語の最後までその存在感を失わない。キャシーにとっては、ルースは、両義的な存在である。憎たらしくはあるが、彼女を抜きにしては、自分とトミーの物語をすることは不可能。実際、ルース死後の後日談的色彩が強い、猶予の噂に賭けてトミーと自分が取った行動の第一の弁明として、キャシーは、それはルースの遺志であったと言う。

ルースは、キャシーの物語においては、二回死ななければならないという運命を背負わされている。まずは、生物学的な意味での死。しかし、彼女は、物語を弄することができるキャシーの手中においては、生物学的な死を超えた生命を与えられている。生物学的な生命の限界を超えて、記憶する者がいるかぎりには存在し続けるという発想の下で物語をするキャシーは、自分の物語を完遂するまではルースを安眠させることはしない。このことは、上で見たとおり、キャシーが実は二つの物語をしているということと関係がある。ルースとトミーの死がキャシーの語りにおいてどのように扱われているか、比較して見てみると、あるコントラストが見えてくる。ある意味、キャシーはルースのほうは二度も死なせておきながら、トミーのほうは一度も死なせない。そのように読める次元が、彼女の物語には確かにある。生物学的に死ぬのは、もちろん、二人とも同じなのだが、違う

のは、キャシーがする物語の世界における二人の生死のありかたである。ここで言う物語の世界とは何であるのかは、更なる説明が必要だが、それは後ですとして、とりあえず、物語の結末で、キャシーは、トミーの死の直後、空想の中で彼を蘇らせており、そして、まさにそこで物語を終えていることを確認しておく。生物学的にトミーを失ってしまうやいなや、キャシーは、まるでその事実を打ち消そうとするかのように、すぐさま彼を別の次元で生き返らせる。そのようにトミーは一度も死なせない次元は、まさに、ルースを二度も死なせる次元でもある。そして、それは、端的に第二の物語に属する次元である。そこでは、キャシーのルースに対する復讐劇が、密かに、しかし激しく、起こっている。二度も殺すのであるから、第一の物語においては、そのようなことは起こっていない。そちらでは何が起こるのかと言えば、キャシーが親友二人を相次いで失い、二人の記憶を大事に心にしまっておく、というだけのことである。死の意味は一義的に固定されており、キャシーがトミーが蘇る姿を見らるというのは、単純な意味での「空想」以上のものではない。

この点でも、第二の物語のほうが進行が遅い。そして、ここでは、進行が遅いということは、即ち、物語全体の終わりを遅らせる働きをしているということでもある。マダムとエミリ先生から直に話を聞くことにより、キャシーとトミーが二人で更に一緒の時間を延長して過ごす可能性は否定された。それにより、第一の物語は、展開が加速することを余儀なくされる。間もなくキャシーの物語は結末を迎えるであろうという感触が、一気に強まる。猶予とは、クローン人間たちのあいだに回っている「噂」にすぎなかった。噂とは、物語の一種であり、決定的に否定されるまで延々と続きがちなものである。しかも、特にこの噂は、エミリ先生が言うように、「何もないところから何度でも発生するのです。出所を一つ探し当てて消し止めても、またどこか別の場所で自然発生します」(pp. 393-94)。終えることができない物語なのである。しかし、おそらくはたいへんな危険を冒してまでルースがマダムの住所を突き止め、それをキャシーに与え

たために、キャシーとトミーに関するかぎり、その物語には終止符が打たれる。キャシーは、もはや、噂を信じることに甘んじることをもってして物語を続けることはできなくなる。しかし、第一の物語の展開が加速し始めるきっかけは、それよりも前に求めることができる。そもそも、マダムに会いに行くという「行動」を取ったからこそ、猶予の噂には根拠がまったくないことが判明してしまったのだ。そのような行動を取ることにリスクがあることは自明であったが、キャシーは行動を起こす決断をした。マダムとの会見に備えてトミーは、遅ればせながらマダムの「展示館」に入れてもらうべく、架空の動物の絵をその頃また描くようになったとキャシーは言っているが、キャシーが描くところのクローン人間たちの世界においては、「準備」と「行動」はまったく別物である。行く日を具体的に決めて、それまでは「計画」の域を出なかったことを行動に移すのはキャシーであって、彼女のその決断にはトミーは関与していない。彼は、ただ、彼女の決断に従っているだけである。

行動を起こすことで、物語は展開し、進行が加速する。上で、キャシーが語る第二の物語は、端的に、起こらなかったことについての物語だと述べた。そのような物語を彼女がしやすくするような空気が、ヘルシヤム時代には特に濃厚であった。それを象徴するようなエピソードがあるので、見直しておく。第5章で語られている、ジェラルディン先生誘拐の陰謀と、それを阻止すべくルースが指揮をしていた、キャシーじしんもある時期は加えられていた「親衛隊」についてのエピソードである。生徒たちばかりでなく保護官も何人か関わって、その優しさのために多くの生徒たちに好かれているジェラルディン先生を誘拐しようと陰謀を図っている連中がおり、それを阻止しなければならないとルースは言い立てて、親衛隊を組織している。隊員たちがルースの言うことをどれだけ真剣に信じていたかはどうでも良い。隊員たちの主な動機は、他の生徒たちから見上げられていたルースに好かれているということを誇示することだけだったのかもしれない。それよりも、この親衛隊がやっていたことには一貫したパターンが

あって、そちらのほうが重要である。

そして、ジェラルディン先生を守るためにわたしたちが何をしたかと言うと……とくに何かをしたという記憶がありません。わたしたちの活動の中心は、誘拐計画の証拠をどんどん集めることでした。証拠さえ集めれば、なぜか間近の危険は避けられると信じ、それで満足していました。(p.82)

やっていたことはといえば、情報を集めるばかりで、行動レベルでは何もしていなかった。しかし、彼女たちは、それで「満足」していた。行動を起こしてしまうと、そのような陰謀などないことが証明されて、親衛隊そのものが解散になる危険があるということが分かっていたからである。何が「間近の危険」なのかがいささか曖昧である点に注意したい。とりあえず、陰謀説を信じるならば、危険に晒されているのはジェラルディン先生の身なのだが、実は、そう信じる、あるいは信じるふりをし、なおかつ何も行動を起こさないことによって回避できる、別の危険がある。陰謀説という物語が否定されてしまうことである。もちろん、生徒たちが本当に回避しなかったのは、そちらのほうの危険である。

同じ章の終わりのほうで、行動を起こすことは、動機が何であれ、予期せぬほどの災いをもたらすものであって、してはならないことだとキャシーが学び、反省するくだりがある。ルースが素敵な筆入れをジェラルディン先生からプレゼントとしてもらったとこれ見よがしに仄めかすことにキャシーは我慢がならなくなり、それは真実ではないということを自分は知っているという行動に踏み切る。すると、結果は、予想だにしていなかったほどに、ルースに、そして自分じしんにも、深い傷を残すものであった。

……ちらりとルースを見てショックを受けました。わたしは何を期待

していたのでしょうか。それまでの一ヶ月間、ありとあらゆる空想や妄想を描きながら、実際にいま起こりつつあるような状況になったらどうするか、一度も考えたことはありませんでした。目の前に取り乱したルースがいます。……わたしは、なんということをしたのでしょうか。あれだけの努力をして、計画を立てて、それは何のため？ 最も近い友人を苦しめるため？ (pp. 95-96)

万事につけて、行動を起こすことは潜在的には極めて危険でありえるという空気が、常時、ヘールシャムにはあった。保護官に逆らうようなことをしたり、規則を破ったりすることは、特に、たいへん危険であるという、暗黙の諒解があった。もちろん、そのような諒解の背後にあったのは、過去に敷地の外へ出た生徒に対してヘールシャムが採った残酷な措置への恐怖心である。その恐怖心は、生徒たちの「森」(p. 80) への恐怖心に凝縮されて、象徴的に表現されている。敷地外に出て死んだ生徒たちについての言い伝えの真偽については後で考えてみるが、それはさて置き、ここでは、行動をとることは甚大な災いをもたらしかねないということを、キャシーはこの場面で身をもって学んだこと、そして、それは、ヘールシャムの生徒たちは皆、薄々と知っていたことであるということだけを、確認しておく。

むろん、ヘールシャム時代、生徒たちはまだまだ将来のことを切迫して考えていたわけではないので、行動を起こさなくても、十分な満足を得ることができた。しかし、4回目の提供の通知が間近に来るであろうトミーとの将来が案件になっている時期の、後のキャシーにとっては、事情はまるで違う。行動を起こすことはたいへん危険であることは同じだが、起こさないことによって、もはや、満足を得ることは、彼女にはできない。板挟みのような状態に、彼女は置かれている。彼女には、マダムにトミーと一緒に会いに行くほうが、より良い未来が得られるなどという保証は何もない。それでは、何が彼女を行動に駆り立てる決断をする方向に動かして

いるのだろうか、という問いに対して、少なくとも一つは、明確な答えを出すことができる。総じて、ルースの死後、トミーと二人だけで残されたキャシーは、残された時間はもうあまりないという感覚に段々と強く襲われるようになっていくが、そこには、トミーの間近に迫った最後の提供とは関係のない、キャシーなりの個人的な理由により、非常に重要なある出来事が絡んでいると思われる。ヘールシャム閉鎖の噂である。それが噂ではなく揺るがぬ事実でもあるということは、マダムとエミリ先生との会見で初めて明らかになるが、噂として耳にした時点から、それはキャシーの将来についての考えかたに、明らかに影響を及ぼしている。ヘールシャムの閉鎖は、キャシーが語る第一の物語においては、ルースとトミーと共に過ごした貴重な子供時代の記憶の美しさに更に磨きをかける効果を持つだけのエピソードにすぎない。しかし、第二の物語の文脈では、その意味合いは複雑である。

ルースの死以降、第二の物語の進行が二人の死をめぐって遅れる経緯は、既に指摘しておいた。その論点をもう一度整理しておく、ルースの場合は、生物学的な死後も、キャシーの語りの都合により、言わば死が延長されて、二度も死ぬようなかたちになっている一方、トミーの場合は、こちらもキャシーの語りの都合により、生物学的には死んでも、彼女の空想の力が彼を完全には死なせることをしないということである。ルースの場合には死が延長され、トミーの場合には生が延長されていると、大雑把ではあるが、言える。そうして、キャシーの第二の物語は、延命を図ることに成功している。物語の延長というかたちで、それは一種の「猶予」を獲得していると言っても良い。しかし、同時に、彼女がトミーと連れ立ってマダムを訪問し、猶予の噂の真偽を確かめようという行動に出たことが、結果的には、彼との残された時間を短縮してしまったことも事実である。その行動の結果として、トミーはキャシーから離反するからでる。そうになってしまう可能性が大であったということに彼女が気がついていなかったはずはない。では、なぜ、彼女はその行動に出る決断をしたのか。その動

機を考える際に、意外と大きく立ち現れて来るのが、ヘルシム閉鎖の噂なのである。

クローン人間たちの「人生」の短さは、否が応でも、キャシーの物語において、顕在的な事実として提示されざるをえない。しかし、ヘルシム時代から、介護人をしている現在に至るまで、一貫してエミリ先生のクローン人間教育理念に忠実であり続ける彼女は、当然のことながら、そのことを不条理とは考えない⁽⁴⁾。エミリ先生の教育理念とは、要点を言えば、クローン人間は、自分に与えられた運命に疑念をおぼえることなく、どれだけの限界が課されようとも、その枠内で可能なかぎり幸せに生きようとする態度を学ぶべきだ、というものである。キャシーが介護人として優秀である理由は、エミリ先生のそういう教えを、提供者に接するしかたにおいて実践しているからに他ならない。クローン人間たちにとっては、科学的に培養された存在であるため、自分はいったい何者なのかというアイデンティティーの問題は当然あるし、生殖ができないように作られているという問題もある。提供に伴う身体的な苦痛もあろう。しかし、彼らにとっての最大の問題は、やはり、人生の短さである。キャシーは、しかし、それにさえも、少なくとも自分の中では、対処法を決めており、本当に疑いを持っていないようである。彼女の物語が醸し出す異様な雰囲気は、描かれる世界の不条理にまるで釣り合わない語り口の冷静さに起因している。その冷静さの根拠が、読者にはにわかには分からない。読者とはとりあえず「我々」読者だが、キャシーは「我々」に語りかけているわけではないことを、ここで思い出しておく。彼女が想定している読者とは、他のクローン人間たちである。しかも、既に提供を開始しているクローン人間たちを特に念頭に置いている可能性が高い。要するに、キャシーがするこの物語は、彼女の介護活動の一環としても読めるのである。そういう読者たちに、キャシーは、エミリ先生の教えを伝えようとしている。介護人として、彼女は、提供者たちを動揺させたりしてはならない。そのために、彼女の語り口は、総じて、読者を不安にさせないようなものになっているのであ

ろう。しかし、説得力をもってそうするためには、まずは彼女じしんが、自分の中で不安を抱えていてはならない。

実際、抱えていないのではないか。キャシーは、自分の人生の絶対時間における短さを十分に補償するある認識、時間観を身につけており、それが揺らぐことはないように見受けられるからである。まずは、自分に定められた人生の長さ（短さ）は無思考に受け容れるという態度が徹底しているのだが、それに加えて、短いものを長く感じさせてくれる独特な時間観を彼女は持っている。結果的に、彼女にとっては、人生の絶対時間としての長さは、問題になっていない。その時間観とは、一言で言えば、時間とは、適切なしかたで物語行為をすることにより、伸縮が可能なものであるという考えかたである。例えば、第二の物語が第一の物語に必ず遅れていることは物語を引き延ばす働きをする、ということは既に指摘したとおりだが、それは同時にまた、ひいては、読者の時間の認識に働きかけてもいるのではないか。読書時間が経過する速度を落とすのである。二つの物語のあいだの時間差は、もちろん、読書体験においてのみ生じる架空の時間差である。しかし、キャシーにとっては、「現実」と「架空」の違いは、「我々」にとってほどには大きくはない。この論点は後で更に踏み込んで検討するが、彼女が「現実」の世界、クローンではない人間たちが生きる「外」の世界を遮断するような語り口を採用していることは、容易に見て取れるはずである。彼女がそうするのは、自分がその中で生きてきたところのクローン人間たちの世界のほうが、彼女にとっては、遥かに現実味があるからである。現実世界から区別されるものとしてのクローン人間の世界へのキャシーの同化度は極めて高く、「我々」には彼女の現実感の理解しやすいものではないが、「我々」はそれぞれ「空想」をして、理解しようと努めるしかない。

キャシーがクローン人間たちの世界に高度に同化しているということは、彼女をして、自分がする物語がその世界のありかたを変えうると信じることを可能にする。そのことが彼女に与える力は大きい。現実と物語のあ

いだの距離が極小化するため、勢い、彼女の語りは自信に満ちて、説得力が増大し、「我々」が、定義上入り込むことができない世界に、空想の域においてではあっても、いくらかでも入り込むことを可能にしている。しかし、彼女の物語が絶大な効力を発揮するのは、とりあえずは、クローン人間たちの世界内においてである。次のエピソードを第1章初めでキャシーが語っているのは、象徴的である。

昨日話したばかりなのに、なぜか初めてのことのようにまた聞きたがるのです。最初は薬のせいかと思いました。でも、違います。頭ははっきりしていましたから。あの人は、きっとヘールシヤムのことをただ聞くだけでは満足できず、自分のこととして——自分の子供時代のこととして——「思い出したかった」のだと思います。使命の終わりが近いことはわかっていました。ですから、わたしに繰り返し語らせ、心に染み込ませておこうとしたのでしょう。そうすれば、眠れない夜、薬と痛みと疲労で朦朧とした瞬間に、わたしの記憶と自分の記憶の境がぼやけ、一つに交じり合うかもしれないではありませんか。(p.13)

幽玄の境地とさえ言える不思議な心理状態を描いているこのくだりは、物語の冒頭に置かれていて、物語全体に浸透しているどこかしら不気味な基底音を、巧みに設定している。直後に牧歌的なヘールシヤム時代の回想が語られ、その衝撃は中和されているが、その技法については上で触れておいた。冒頭からキャシーは自分が介護人として優秀だと認められていると言いつて、上のくだりは、その話の流れの最後のところに出て来る。自分がかつて介護をしたある提供者の話なのだが、二つのことを確認しておきたい。まずは、この提供者がなぜこのような奇妙な願望を抱くのかについてである。物語が進行するにつれて徐々に明らかにされていくことだが、クローンの子供たちを「教育」する施設としては、ヘールシヤムは例外的に「人道的」であり、実際には、多くの提供者たちは、過酷な環境の中で

育てられた。そういう外の世界の現実をすぐには明かさないというのは、これもまたキャシーが多用する語りの「遅延」の技法の一つなのだが、それについては後でまた取り上げることにする。この提供者は、おそらく、そういう不運なクローンの一人であった。二つ目は、キャシーが彼にヘルシヤムでの子供時代について物語をしてやる時、彼は、現実と物語の境界線を消し去ろうとしていることである。彼にとっては、キャシーから聞く物語は、そういう効果を持っていたということがポイントである。現実と物語のあいだの境界線が消える可能性というのは、この提供者だけが求めたわけではない。語り手キャシーじしんが、そもそも、そういう可能性に賭けて物語をしている。未来完了時制において、自分が「使命の終了」をする時、自分の人生は、自分が物語ったとおりのもので現実にもあったと思いを込めたいという願望が、キャシーには、間違いなくある。

キャシーにとっては、物語をすることは、時間の認識を操作することでもある。端的に、彼女は、短い自分の人生を、物語行為によって引き伸ばそうとするのだが、そうするとき、彼女は、回想において過去へと戻り、そこから未来をまるで幻影であるかのように捉え直すという手法を採る。物語全体が、一旦過去へ戻り、そこから未来へ向けて前進するという順序で構成されていると、キャシーじしんが明言している箇所がある。

古い記憶と言っても、わたしの関心は主としてヘルシヤム以後にあります。成長してヘルシヤムを離れたあと、トミーとルースとわたしの間にはいろいろなことがありましたから……。でも、何をどう考えるにせよ、その背後には必ずヘルシヤムの日々があり、まずはそちらを注意深く整理しておかないと、先へ進めないような気がしています。(p.61)

過去時制だけの中で話が複雑に前後する巧妙な手法もキャシーは披露しているが、それは後で検討するとして、ここではとりあえず、未来へ向けて

前進するためには、すぐさま過去へと後退しなければならず、そこから改めて前進を図るとというのが、キャシーの、物語行為をもって時間を操作する際の手法の基本形であることを、指摘しておく。更にもう一点確認しておく、キャシーがする物語は、願望のベクトルという観点から見ると、前向きであり、見たところの体裁とは裏腹に、懐古談ではまったくない。この二重性は、またしても、キャシーが二つの物語をしていることと関係している。親友三人の悲しくも美しい物語である第一の物語には懐古談の様相が強くなるのだが、そこでは秘められていて顕在しないキャシーじしんの欲望が駆動力になっている第二の物語においては、彼女の目線は徹して未来へと向けられている。前進しようとするときには、彼女は形式的に確立したパターンに従うように必ずまずは後退するのだが、意図はあくまでも前進することのほうにあるのである。そのことは、さりげなく、物語の最後の数行で、宣言されている。トミーが蘇って自分に向かって手を振るといふ空想をした後、彼女は言う。

空想はそれ以上進みませんでした。わたしが進むことを禁じました。顔には涙が流れていましたが、わたしは自制し、泣きじゃくりはしませんでした。しばらく待って車に戻り、エンジンをかけて、行くべきところへ向かって出発しました。(p. 439)

「行くべきところ」がどこであるのかは分からないが、記憶に耽溺してしまいそうな自分を「自制」をして、未来へ、先へ進むと宣言していることだけは間違いない。

クローン人間の多くは、エミリ先生とマダムが人道的な教育をクローン人間の子供たちに施して彼らにも「魂」があることを証明しようという運動を起こす以前は、過酷な扱いを受けていた。クローン人間のありかた全体を見渡そうとするのであれば、語り手キャシーが過ごした輝かしいほどに牧歌的であるヘールシャムでの子供時代とは似ても似つかないような、

おそらくは残酷でさえある環境をしか知らずに死んだ多数のクローンたちの亡霊のようなものさえ見えてくる。キャシーは、同類の中では、特権的に幸せな境遇にある。猶予を申請しにキャシーとトミーがマダムに会いに行ったとき、二人の問い合わせへの返答の中でエミリ先生が特に強調するのはそのことである。キャシーが迂闊にも疑義を挟んでしまう場面もあるが、クローン人間の総体を見渡したとき、説得力があるのは、やはり、エミリ先生の言い分のほうであろう。そもそも、キャシーが、物語をこの期に及んでするだけの「余裕」を持っているのも、エミリ先生主導の下に運営されていた当時のヘールシャムのおかげなのである。

「全国いたるところで、この瞬間にも、実に嘆かわしい環境で育てられている生徒たちがいるのです。ヘールシャムの生徒には想像もつかないような劣悪な環境です。わたしたちの運動が挫折したいま、これからはもっとひどくなっていくでしょう……。わたしたちの保護下にある間は、あなた方をすばらしい環境で育てること——何ができなくても、それだけはできたつもりですよ。そして、わたしたちのもとを離れてからも、最悪のことだけは免れるように配慮してあげること。少なくともその二つのことだけはしたつもりです。」(pp.398-99)

物語をすることができるようになるだけの教育をヘールシャムはキャシーに施してくれたことは言うに及ばず、振り返ればいつでも心の拠りどころとなるようなヘールシャムでの子供時代を可能にしてくれたのは、エミリ先生と、彼女の同志、マダムであった。先へ進むためにはまずは後退するのがキャシーの語りの基本パターンであると上で述べたが、過去にヘールシャムがあったからこそ、キャシーは後退することができる。彼女にとって、ヘールシャム時代は、介護人をしている今の自分にとって、ますますすることが困難になりつつある前進をする際に必要な、貴重な記憶の宝庫である。

そのヘルシヤムが閉鎖するという噂を聞いたとき、キャシーが真っ先に考えたことの一つは、早急に行動を起こさねばまずいのではないかとということであった。

そして、徐々にあることに思い至りました。それは、時間切れ、ということですが、やりたいことはいずれできると思ってきましたが、それは間違いで、すぐにも行動を起こさないと、機会は永遠に失われるかもしれない、ということです。(p.325)

既に見たように、行動を起こすことは危険であるとヘルシヤム時代にキャシーは学習し、その後も、早めに介護人になってコテージを去ることを決断した以外には、自分の判断で行動を起こすということはしてこなかった。しかし、ヘルシヤム閉鎖の噂が、彼女に重大な決断を迫る。案件は時間である。残された時間は有限であるという、それまでは考えることを自分に禁じてきた事実について、緊急に考え、そして行動を起こさねばならないと、彼女は思う。介護する提供者を選べるという特権を使ってルースの介護人になるという行動を起こすことで、ルースとの再会、そしてトミーとの再会へと物語は展開していくわけだが、しかし、キャシーに彼女の人生で最大の行動を起こさせるきっかけがヘルシヤム閉鎖の噂であったのは、なぜか。それは、おそらく、彼女の時間の捉えかたと関係している。上で見たとおり、キャシーにとっては、未来とは、過去のフィルターをとおして見る幻影のようなものだ。過去を振り返ることを同時にしなければ、キャシーは未来を考えることができない。その意味では、過去とは、彼女にとっては、先へ進むための材料にすぎないとも言える。物語行為をする際に、実際、しばしばやっているのだが、彼女には、回想と称して過去をあれこれと、今の自分に都合が良いようにいじり回す性癖がある。ルース、そしてトミーと再会してから、彼女は、ヘルシヤムについて一緒に回想するとき、記憶に食い違いがあったと何度か言っているが、そうす

るとき、彼女は、自分にとってはヘールシャムは、実際には何が起こったのか曖昧にしか思い出せない場所であるほうが都合が良いということを、読者に暗に伝えている。キャシーにとっては、ヘールシャムが、回想をするときに曖昧であるという意味で「開かれた」場所であることが、実は、極めて大事なのだ。現実には、外の世界からは遮蔽されており、ほぼ完全に閉じた世界でヘールシャムはあったのだが、その中に閉じ込められているためにそれが自分にとっては唯一の世界であったキャシーにとっては、昔も今も、生の経験において、そして記憶の中でも、ヘールシャムは開かれた場所でなければならないのである⁽⁵⁾。

ヘールシャムの地所の地勢は、そういう観点からすると、象徴的である。外界からは遮断されていながら、中にいる者たちにとっては敷地の展望が良い、圧迫感などまったくなくとも開放的な場所として、ヘールシャムは描かれている。

ヘールシャムは緩やかな窪地にあって、周囲のどこを見ても、野原がなだらかに立ち上がっています。ですから、本館のどの教室にいても——体育館にいてさえも——野原を下ってヘールシャム正門に通じる、あの細長い道を見ることができました。正門自体が本館からかなり離れたところにありますから、車はそこに入って、しばらく砂利道を走り、藪や花壇の前を通り過ぎて、ようやく本館前の中庭に到着します。(p. 56)

実際には、それを越えてしまうと死が待ち受けているかもしれない厳格な境界線が敷地にはあった。しかし、そのことに生徒たちが感じていた恐怖感は、「森」に凝縮されていたということに、キャシーの語りにおいてはなっている。外界から「侵入」して来る車があれば、中にいる者の目には、それは、敷地の空間がたいへん開かれたものであったため、余裕をもって見つけることができたと言ったとキャシーは言う。しかし、逆に、内側から外へ出

ようとする者はどうなってしまったのかについては、昔、そうした生徒たちがどうなったかについての先輩たちからの伝え話、信憑性のほどは定かではない話というかたちでしか、キャシーは触れていない。それは、もちろん、キャシーが記憶したくないヘールシャムの顔だからである。実際にはどうであったのかは、キャシーの語りだけからでは分からないが、「森」がどれほどの恐怖感を生徒たちに与えていたかがいくらかでも参考になるとすれば、マージへのいじめ行為の場面は読み直しておかねばならない。

マージ・Kがわたしたちを困らせることをして、わたしたちは腹を立てていました。夜になって、マージに思い知らせようということになりました。ベッドから引きずり出し、窓ガラスに顔を押しつけて、目を開けて森を見るように命じました。マージは、最初、瞼をぎゅっと閉じて抵抗していましたが、わたしたちが腕をねじり上げて無理やり瞼を開かせました。月明かりの夜空に、遠く、くっきりと森の輪郭が見えたはずです。マージは、その夜を恐怖で泣き明かしました。

(pp. 81-82)

このくだりは、ヘールシャム時代を回想するキャシーの語りにおいて、特異な性質を持っている。唯一、生徒間での暴力行為が描かれているくだりであるからである。反復がない描写は読み流されてしまいがちだというメカニズムをキャシーは熟知しているかのごとくである。読み直せば、マージの「森」とキャシーやルースたちから受けた暴力行為への反応は、別の、何か実質的な根拠がなければ説明できないほどに過度であることは、明らかではないだろうか。先輩たちからの伝え話は、おそらく、真実を伝えている。

ヘールシャムは確かに厳しく閉じられた場所であったことを、キャシーは仄めかしてはいるのである。彼女は、そういうヘールシャムの顔を描写するのに多言を弄していないので、読者はつい見逃してしまいかねない。

しかし、そういう「裏話」があるということを押さえておかなければ、なぜキャシーがヘールシャム時代の記憶にそれほどまでにこだわるのかは、見えてこない。彼女は、「閉鎖」と「開放」という区別で空間を捉えることに、実は、非常に敏感であり、閉じられた場所には警戒心を抱く傾向がある。介護人としてイングランドを車で駆け巡りながら、たまにサービスエリアで一息つくときに彼女を襲う安堵感は、そこに淵源していると考えて差し支えない。そこで彼女を感じる開放感は、自分でもこぼす孤独でもある介護人生活を、彼女が例外的に長く続けている、もう一つの理由なのかもしれない。

ヘールシャム閉鎖という案件は、キャシーにとって、過去が過去の中に封じられてしまうことを意味している。もう決して戻ることはない場所だが、彼女にとっては、ヘールシャムは、決して自分の過去の記憶の中だけにある場所ではなく、現在もどこかにあり、車で旅をしながら偶然に見かけることができるものでもなければならない。

田舎をあちこち移動していると、いまでもヘールシャムを思い起こさせるのを目にします。霧がかすむ野原の片隅を通り過ぎ、丘を下りながら遠くに大きな館の一部を望み、丘の中腹に立つポプラの木立を見上げて木の並び方にはととする。そんなとき、「あっ、ここだ」と思います。「見つけた。ここがヘールシャムだ」と。でも、ありえない……。そう自分に言い聞かせて、またとりとめのない思いに戻り、運転をつづけます。(p.13)

ジュディ・ブリッジウォーターのカセット・テープと同じで、本当に見つけてしまっはまづいので、どれほどそれらしい風景に出くわしても、「ありえない」とキャシーは考えるから、絶対に見つけることはないのだが、そもそもさがすことができるのは、ヘールシャムが今でもどこかに存在しているからである。もちろん、より重要なのは、運転をしているとき

に見かけるかもしれないヘールシャムではなくて、物語をするときに記憶を手繰って戻るヘールシャムのほうである。ヘールシャムが今でもあるということは、キャシーの記憶を、ある意味、「開かれた」ものにしてている。既に見たとおり、キャシーは、未来に前進するためにヘールシャム時代を回想している。そうするためには、過去は、現在に、そして更には未来にとっても、開かれたありかたをしていなければならない。そのためには、ヘールシャムという場所は、キャシーの過去の記憶の中だけにではなく、現在も存在していなければならない。閉鎖は、ヘールシャムを、現在、そして未来から切り離し、過ぎ去った過去という明確な境界線がある領域に封じ込めてしまう。キャシーが不安をおぼえるのは、過去がそういう意味で「閉じた」ありかたをとってしまうことに対してなのではないか。

現在でも存在するということが、キャシーの頭の中では、ヘールシャムを、物語の材料として自由に加工できるという意味でも、「開かれた」ものにしてている。そうだとすると、それが閉じたものになってしまうと、物語をするしかたにも制約がかかってくるということになる。すると、キャシーにとっては、物語をすることは、即ち、未来に処することでもあるので、行動を起こさねばならないという圧力がかかってくる。それで、閉鎖の噂が彼女を行動に駆り立てるのではなからうか。そのとき、彼女が未来を見るときに幻影性は、確実に減じている。未来は、もはや、それまでのように曖昧なままであり続けることはできなくなっている、と言っても良い。そして、その後、実際に行動を起こすと、ヘールシャムなる場所の曖昧さは更に減少していく。マダムとエミリ先生に再会するという展開に至り、キャシーは、外の世界におけるヘールシャムの位置づけについて話を聞くことになる。それは、視点をクローン人間の世界の外部にとることを強要する性質の話である。その視点は、それまで彼女が一貫してとることを拒否していた視点である。外から見れば、ヘールシャムは徹底的に閉ざされた場所であったということを、キャシーは、聞きたくはなかったであろうが、聞かされる。それに加えて、「そもそも、なぜヘールシャムなの

か」(p.396)について、ヘールシャムの「起源」についても説明を受けてしまう。このことは後でまた取り上げるが、何かの「起源」、「始まり」が確定されてしまうことを、キャシーは、物語全体をとおして忌避している。理由は、そのものの曖昧さが消滅するからであり、キャシーの物語は多分に過去の、あるいは過去の記憶の、曖昧さに依存しているからである。この会談の後、物語が一気に結末へ向けて収束していく理由は、トミーがキャシーに自分の介護人を辞めるよう求めるからでもあるが、それ以上に、キャシーじしんが、マダムとエミリ先生の話聞いてしまった後では、物語をするのが極端に困難になるからでもある。その段階にまで至ると、キャシーは、未来を幻影のようなものとして見ることは、ほぼ不可能になる。キャシーにとっては、おそらく、猶予が何の根拠もない噂にすぎないということを知らされるよりも、ヘールシャムについての曖昧さを吹き飛ばしてしまうことのほうが、より大きな打撃であるはずである。物語の結末では、未来に関して曖昧さはもう残されていない。すべて、行動を起こしてルースの介護人になったことの帰結であるが、では、キャシーは、行動を起こさないほうが良かったのであろうか。そうではない。行動を起こさなかったならば、物語の第三部は書けなかったからである。

キャシーにとって大きな転機であったヘールシャム閉鎖の噂を、彼女は、さほどの出来事ではなかったという素振りで読者に伝えている。振り返ってみれば、「終わりの始まり」と呼んで良いほどに重要な出来事であったにもかかわらず、ヘールシャムの閉鎖についてキャシーが読者に知らせる時点では、彼女じしんがその噂を初めて耳にしたときから既に一年が経過している。「ヘールシャム閉鎖の噂を耳にしだしたのは、駐車場でローラを見かけるより一年ほど前だったでしょうか」(p.322)。既に見ておいた、キャシーがよく使う、「その後」からある話を始めるという技法が使われている。それは、起こった出来事が大したものではないという印象を、総じて、読者に与える。ここでは、しかも、ヘールシャム時代の旧友のローラとコテージを出てから7年後にたまたま出合って、情報交換をした後、

別れ際に話題として出ただけというような、さり気ない切り出しかたをキャシーはしている。更に、そうして読者を過去完了時制の無風地帯に一旦留め置いた上で、キャシーの語りは、現在に向けて前進するのではなく、更に別の過去完了時制へと逆戻りする。ローラと出合った日よりも数日前に、ウェールズのある町で、たくさんの風船を束にして持ったピエロを見かけ、その風船は昔のヘールシャムの生徒たちのようであるかのように自分には思われた、というエピソードが続くのである。そして、そこから、過去完了時制を更に細かく割るかのように、それに先立って、ヘールシャム出身のロジャーから、閉鎖についてかなり確実な話を聞いた時点に一旦戻って、そこから、その後の数ヶ月間、いかに自分が既にそのことの意味合いを考え続けていたかを、キャシーは読者に伝える。「時間切れ」(p.325)になると嫌なので、すぐにでも行動を起こさなければいけないと思うと彼女が読者に伝えるのは、そのような時制上の蛇行を経てからである。このような精巧な時制の操作のため、読者にとって、物語は前進しているのか後退しているのか分からなくなってしまう。この技法の効果については、後で踏み込んで考察する。ここでは、この章(第18章)だけを読んでも目に留まる明らかな矛盾の一つ指摘しておく。「すぐにでも行動を起こさない」と(p.325)と、キャシーは、ロジャーの話を聞いた後、考えるようになったと言っているが、では、なぜ、その時点で行動を起こさなかったのだろうか。明らかに、行動が、語りに対して遅れをとっている。理由を彼女は説明していないが、少なくとも、このくだりだけからでも言えることは、キャシーは、自分の人生の命運を決することになる一重大事を語るに際しても、物語技法を凝らすだけの冷静さを失っていないということである。そして、そのことから、彼女にとっては、実際に何が起こったかよりも、何かをどのように語るかのほうが、詰まる場所はより大切なのであろうということが分かる。

過去の複数のエピソードを、実際に起こった順序ではなく、後に起こった出来事から時間を遡って以前の出来事へと戻ったり、戻ったかと思う

とその後の別の出来事へと進んだりというかたちで語ることにより、出来事の順序について読者を煙に巻くような技法は、どのような効果を狙って使われているか。この技法が精巧に使われているくだりをもう二つ見ておく。第2章の最後のところで、キャシーが、ルーシー先生がトミーに凶工はできなくても良いと本当に言ったのかについてトミーから詳しく話を聞きたくて、彼と池の端でこっそりと会おうと決心するところから、物語時間の錯綜が始まる。池の端でのエピソードは、年長組二年、13歳の頃の記憶である。トミーの話に「展示館」なるものが出てくるので、キャシーは、それが何であったのかを説明するために、思い出せるかぎり自分が初めてその言葉を聞いたと記憶している、5、6歳の頃のあるエピソードを手短かに語る。そこから、今度は、その後、年少組の頃、展示館の話題は生徒たちのあいだで一種のタブーであったことを説明するために、11歳の頃のあるエピソードへと、キャシーは語りを進める。そのエピソードの次は、今度は時間を遡って、8歳の頃に、ルースがマダムは生徒たちを恐れているに違いないと言い出したため、本当にそうかを確かめるために生徒たちがマダムに仕掛けた実験、あるいは悪ふざけについてのエピソード。その後、介護人をしている語りの現在に軽く一旦戻り、再度8歳の頃のこと軽く触れた後、その時点から見て数年後の、13歳の頃の池の端でのトミーとの話し合いへと時間を先に進めることによって、語りを、一旦、話の発端に戻す。しかし、そこに留まるのはほんの数行で、キャシーの語りは、その後、直ちに、それより3年前、10歳の頃に起きた「交換切符論争」と、同じ頃に展示館についてルーシー先生がしたある発言へと逆戻りする。そして、そこからまた、トミーとの池の端でのやり取りの場面へと前進する。このように時間軸上を行ったり来たりしながら語られる一連のエピソードは、すべて、トミーとの池の端での会話をきっかけとして、全体としてその場面のまとまった説明となるように工夫して、キャシーが並べているものである。全体として確かに内容にはまとまりがあり、語りの時間も最終的には元いた時点へと戻っているだけに、かえって、その中

での頻繁な後退と前進が際立って見える。

見ておきたいもう一つの例は、コテージへやって来て一年後の夏のある日の夕方、近くにある今ではもう使われていない古びたバス待合所で、キャシーとルースが、どうしてルースはわざとヘルシヤム時代のことを忘れたふりをやたらとするのかをめぐって口論になる場面と、それに続くいくつかのエピソード。バス待合所の場面で、実は、キャシーはルースにあることを言おうとしていたのだが、そのことの意味合いを説明するには、数週間前、当時自分がつき合っていたレニーという先輩が介護人になる訓練を受けるためにコテージを去った時点に戻らなければならない、とキャシーは言う。一旦そこへ戻ると、次は、そのおよそ二週間後のある晩、寝る前、その当時は二人で毎晩そうしていたように、キャシーとルースがキャシーの部屋で仲睦まじく打ち解けた話し合いをしている場面のエピソードへと、キャシーの語りは進む。ノーフォークでトミーと一緒に見つけたジュディ・ブリッジウォーターのカセット・テープをキャシーはルースからそれまでなるべく隠すようにしていたが、この晩、ルースは、それまでにもう見つけながら黙っていた可能性もあるが、キャシーの目の前で「正式」に見つける。そのとき、キャシーは、ルースに乗せられて、迂闊にもトミーを冗談のネタにして笑ってしまうが、それが、今度は、数日後の、近くの教会墓地での、ルース、トミー、キャシー三つ巴での諍いの場面、ルースがキャシーの信頼を裏切る発言をし、キャシーとトミーの仲を大きく割く場面を呼び込むことになる。その後、話は先へ飛んで、教会墓地でのエピソードがいかに三人にとって重要な意味を持っていたかに、「コテージを出てずいぶん経ってから」(p. 303) 気がついたとキャシーは言い、それから彼女は、教会墓地での出来事の後に続いた日々のことへと話を短くではあるが戻し、そこから今度は、前進して、古びたバス待合所での場面に戻る。その場面でそもそもキャシーがルースに言いたかったのは、教会墓地で起こってしまったことには何らかの解決をしておくべきではないかということだった、とここで初めてキャシーは明かし、そこから話は前

進して、まさにそのような内容の話をしているときに口論は起こったのだと説明がなされ、そこで、キャシーの語りは一連のエピソードの発端へと戻って、それらにまとめをつけている。

この技法が生む効果は、キャシーの物語上での時制操作にもかかわらず現実の時間は、当然、直線的に前進し続けていたはずだという読者の認識を、ある意味、麻痺させるというようなものではないだろうか。回想をする際のキャシーの連想が規定する彼女の物語の時間のほうが、現実 flowed 時間よりも重要であって、現実 flowed 時間の軸上でエピソードがどう並ぶことになるかなどはどうでも良いと感じるように、読者を誘導しているのではないだろうか。このことは、上で既に指摘をしておいた、クローン人間たちの世界に閉じこもって生きることを選ぶキャシーにとっては、自分の現実が外界の現実とは違ったものであるに違いないということと関係している。やがて、マダムとエミリ先生から、外界の事情を聞かされることになり、自分なりの現実を維持し続けることは、キャシーにとって、物語の終盤、困難になっていくが、それでも、最後まで彼女はそれを手離してはいない。トミーは、最後の最後で、そういう意思を強く持つキャシーから離脱してしまう。キャシーと二人でとどまるのではなく、キングスフィールドに集められた提供者集団に同化することで、外界の現実が規定するところのクローン人間として自分を再定義することを、彼は選ぶからである。それでもなお、キャシーは、外界の現実が自分にとっての現実でもあるという視点をとることを、拒否し続ける。その企てにおいて、彼女は、自分だけが持っている武器を最大限に活用する。それは、物語をするという行為である。彼女が決して捨てることがない信念は、物語は現実を相対化する力を備えているということ。あるいは、現実と物語の架空性のあいだには、それほどの違いはないということ。そういう発想で、キャシーは、物語をする際、時間についてもアプローチしているのではなかろうか。現実 flowed 時間などは物語の圏外へ締め出し、自分がする物語の中で浮かび上がってくる時間のほうに現実感を持つ。そして、それを読者と

共有しようとする。

キャシーの物語において、時間は、先へ向けて前進するのと同様に、過去、そして更に過去の過去へ向かって後退しもする。時間は先へ向かって流れるのは当然だが、それと同じくらいの説得力をもって、キャシーにとっては、過去へ過去へと逆流しもする。クローン人間は人生が短く、それは悲劇であるという視点がある。キャシーの時間観は、そのような視点を解体する力さえ持っている。人生が短いことが悲劇であると考えするためには、時間は容赦なく未来へと流れているという認識が、まず、なければならぬ。そのような認識がなければ、別に人生が短いことは悲劇とはなるまい。確かに、キャシーは、ヘルシヤム閉鎖の噂を耳にしたあたりから、残された時間はあまりないと認識を持つようになる。しかし、その認識に動機づけられて起こす行動は、詰まるどころ、そのような認識を根拠に動いていたのでは、悲劇は最終的には避けられないとの認識にも、彼女を導いていくのではあるまいか。容赦なく流れる時間が悲劇を必然的に生んでしまうのであれば、その流れを止めさえすれば良い。物語には、そうする力がある。そう信じているからこそ、キャシーは、物語をするときに、その時間構成に、いささか過剰と思えるほどの技巧を凝らして、加工をしているのではないだろうか。時間は、放っておけば、どんどん先へと流れてしまう。なので、大局的には、キャシーの物語は、まずはその軸足を、ヘルシヤム時代という過ぎ去った過去に置かなければならぬ。しかし、そのような大まかな図式を提示するだけでは、説得力に欠ける。なので、彼女は、物語をするにあたり、細部にわたって、時間の順流と逆流は同等の重みを持つことを、技法を凝らして実演しているのであろう。一言で言えば、この技法がもたらす効果は、時間の流れを、止めてしまうことはできないにしても、可能なかぎり遅らせることである。

シニカルなキャシーは、現実世界における未来には、どこか根本的なところで何も期待をしていないような節さえある。猶予の噂が否定されると、トミーは夜の闇に包まれた野原で荒れ狂うが、キャシーのほうは、対照的

に、異様なほどの冷静さを保つ。まるで、自分の将来はやはり正式に決められているとおりでであるということが確実になり、どこかしら安堵しているような感さえある。その理由は、ひょっとすると、外界の現実において未決の未来は物語に取り込むことができないということに、彼女は不安をおぼえるからなのかもしれない。外界の文脈において自分の運命は既にすべて決まってしまうのであれば、未来をも、既に起こってしまったものと同じように、自分がする物語においては、扱うことができる。キャシーは、物語をすることによって自分なりの現実を作っている。既に決まってしまったものとしての未来なるものに彼女が動揺しないのは、それは外界の現実においてはそうであるというだけの話であるからであり、彼女にとっては、そのようなことよりも、自分の物語が作る自分なりの現実で起こることのほうが大事であるからであろう。

キャシーに限らず他の生徒たちも、何か深刻な問題が起こると、その後、その話題を避ける傾向がある。それは、ハールシャムでの子供時代に始まり、大人になり、介護人、提供者となっても続く傾向である。例えば、ハールシャム時代、マダムが自分たちを怖がっていることが本当に証明されてしまうと、「……マダムを話題にすることは——タブーとまでは言いませんが——めったになくなりました」(p.62)。しかし、この傾向を最もはっきりと見て取ることができるのは、コテージ時代にルースのポシブルをさがしにノーフォークへ旅をし、それが、ルースにはまるで満足がいかず、一緒に行った他の生徒たちには気まずい結果に終わった後、コテージに戻ってから皆が旅について守った沈黙においてであろう。

あのノーフォーク行きで一つ不思議だったのは、戻ってから、わたしたちが旅のことをほとんどしゃべらなかったことです。あまりに何も言わないので、いったい何をしに行ったのかと、コテージではいろいろな憶測が飛び交いました。それでもわたしたちは口をつぐみつけ、周囲が根負けして噂も収まりました。

なぜしゃべらなかったのか、いまでもよくわかりません。たぶん、ルースしただいたのだと思います。何をどれだけ話すかはルースしだい。わたしたちはルースからの合図待ちで、そのルースはなぜかこの話題で完全に沈黙したままでした。ポシブル騒動の結末に恥じるところがあったのか、それとも謎のままにしておくのを楽しんでいたのか……。ノーフォークに行った当のわたしたち五人の間でさえ、旅の話題は避けられていました。(p. 284)

あるいは、ドーバーの回復センターで数年ぶりに再会したキャシーとルースが、コテージでの不和状態での別れの話題には触れないというのも、意味深である。

ただ、初回の訪問で唯一問題だったのは、コテージでの最後の別れ方に二人とも触れなかったことです。最初にそれを片づけておけば、その後の流れは違っていただかもしれません。でも、わたしたちはそこのところだけを都合よく省略しました。そして、しばらく話がはずんでいるうちに、なんとなく、あれは起こらなかったことにしようという無意識の合意ができたように思います。(pp. 326-27)

もし話題に上げておいたならば「その後の流れは違っていた」かもしれないくらいに、そうするかしないかは重要な局面であったにもかかわらず、二人はそれまでのパターンを踏襲して、話題にしなかった。なぜか。

既に起こってしまった問題について、語らず沈黙するということは、要は、その問題を未決状態のまま、「先送り」ということである。ヘルシャム時代のマダムについての沈黙の場合のように、話題にしてしまうと背後にある何か恐ろしいものが見えてしまうかもしれない不安が絡んでいる場合もあるが、そういう場合も含めて、おそらく沈黙のすべての場合について言えるのは、問題解決を先延ばしにすれば、過去のほうは曖昧な

ままにとどまるが、それと引き換えに、未来のほうで時間が延びるという感覚が生じるということ。それは、総じてクローン人間たちが皆欲するものであろうし、それに加えて、語り手としてのキャシーが自分の物語に醸し出させたい効果でもある。過去を材料に物語行為をする彼女にとっては、そうして過去に関して生じる曖昧さは、欠点ではなく、むしろ、有用である。過去が曖昧であればあるほど、未来は幻影性を増し、希望という大義の下に物語を更に続ける力に勢いがつく。

クローン人間たちにとって、既に起こってしまっただけでなく、もはや手の打ちようもなく、未決のままに抱いて生き続けなければならない最大の問題は、言うまでもなく、自分たちの出生である。物心がつくようになって、そこに重大な問題があると気がつきながら、それについて探求をしてはまずいという諒解を、彼らは集散的に作っているかのようである。ルースがノーフォークで、怒りにまかせて、キャシーに、ポシブルはどうせ人間の屑であろうとまくし立てる場面があるにはあるものの、自分たちの出生に関しては、クローンたちは、総じて、タブーとして語ろうとしないか、それとも冗談として軽く受け流すかのどちらかの手段を使って、話題として正面から取り上げることはほとんどしない。トミーが肘に怪我をしたときの冗談も含めて、潜在的には重たい話題を冗談や何となくの笑いで受け流す場面は、実際、作品中、数多くある。彼らは笑ってごまかすということをしており、その場その場は、読者は、軽く読み流せるのだが、作品全体を見渡すならば、あまりにも頻出するので、そうした笑いには、通底して隠された意味が何かあるのではないかという感覚を持つはずである。それらは、実は、累積して、彼らの出生の「謎」への間接的なポインターになってしまっているのだが、キャシーは、その問題を正面から取り上げることは、なるべく避けている。実際、謎めいた始まりかたをするこの物語を読む（他のクローンではなく）「我々」読者がその問題に気がつくのは、物語がある程度進行してからである。もちろん、それは先送りの一種であり、物語が遅延する効果を持っている。クローンの出生の話題が避けられること

によって生じる物語の遅延は、エミリ先生がキャシーとトミーに、外の現実の世界におけるクローン人間の位置づけを説明した後も、解消することはない。その説明は、「種」としてのクローン人間の出生の説明ではあっても、個別のクローン人間にとっての自らの出生の謎の説明としては、不十分だからである。キャシーがエミリ先生に、自分の存在の意味が外の世界の必要に応じて決定されていることに関して、「でも、そこに生まれたわたしたちには人生の全部です」(p.407) と言うときに指摘しているのは、まさにその二つの事柄の違いに他ならない。なぜそもそも、クローン人間という種がではなく、自分という一個人が存在するのかは、キャシーにとっては、依然として未決の問題として残る。なので、彼女としては、エミリ先生の話をもってして、自分の物語の結末とするわけにはいかないのである。エミリ先生の話は極めて重要であり、だからキャシーは、第22章で、エミリ先生に物語の語り手の座をかなり明け渡している。そのあたりは、キャシーにとって、「物語の危機」と呼んでも良いような局面になっている。しかし、その座をキャシーは、最後の最後まで放棄することはない。自分は存在するというのは自明の事実であり、自分の未来が決定されているというのも、外界の現実には照らせば、事実である。そこには、もはや、問題性はない。しかし、自分の出生、自分の「起源」の謎だけは、解消できない未決の問題として残る。その問題が未決であるからこそ、キャシーは物語を更に先に進めるのである。

クローン人間にはそのような究極の未決問題があるため、案件は何でも良いのだが、「起源」、「始まり」というものに、彼らは、総じて、敏感である。キャシーじしん、とても敏感であり、始まりや起源が問題になる多くのエピソードを、彼女は自分の物語に取り込んでいる。例えば、ジェラルディン先生の親衛隊において、ルースが指揮者としてどのように自分の権威を維持しているかについて、キャシーはさり気なく以下のようなコメントをする。

ルースこそ誰よりも早くから誘拐計画の存在に気づいていた人物で、それを権威の拠り所にしていましたから。わたしたち新参者が入隊するはるか以前に本物の証拠を手に入れていた、あるいは隊員にさえまだ明かしていない事実がある……そうほのめかすだけで、グループ全体の意思を思いどおりに引っ張っていくことができました。たとえば、誰かの除名が望ましいと提案し、反対されそうな気配を感じたときは、顔を曇らせて、親衛隊結成「以前のこと」を何か一言ぽつんと言えやすみます。(pp. 83-84)

ルースが権威を維持する方法は、時間を遡って、自分が一番最初からそこにいたということを仄めかすだけという、極めて単純なもの。しかし、それだけで万事が決してしまう。本当にそうであったかどうかは、誰にも証明できないにもかかわらず。あるいは、トミーがいじめられるようになった発端はいつの何であったかをキャシーは思い出そうとし、ジェラルディン先生の図工の時間に彼が描いた象の絵であったに違いないと言うが、それよりも「……もっと前に遠因があったようにも思えます」(p. 34)とも言い、結局は分からないということになるように、彼女は言葉を選んでいく。ここで重要なのは、その「遠因」が何であったかではない。そうではなくて、ある事柄の始まりについてキャシーが語るとき、まずは一つありえる可能性を言った上で、次に、それよりも更なる過去に遡って別の可能性を指摘するような、前には更にその前があると言って過去へ過去へと遡る動きを見せる彼女の語り口のほうである。

ことの「始まり」をさがすというジェスチャーをまずはとり、探求めいたことをしはするが、結局は分からないという具合に話を持っていくということを、キャシーはしばしばする。ヘールシャムでの幼少時からもう一つ例を拾っておく。展示館について最初に聞いたのはいつのことだったか、とキャシーは問う。5、6歳のときに、アマンダという生徒が、自分が粘土で作っていた何かを褒めてくれたときにその表現を使うのを聞いたのが

最初だったのではなかったか、とキャシーはまず言った上で、続けてこう言う。

そのときの嬉しく誇らしい気持ちは、いまでも忘れません。でも、そのあとすぐに「まさか」と心の内で否定し、「展示館行きだなんて、まだわたしたちに作れるわけない」とも思いました。ですから、あのときのわたしは、もう展示館のことを知っていたに違いないのです。
(p.52)

ここでは、キャシーは、記憶のありかたについて洞察深いことを言っている。ある事柄について最初のときを思い出すことができるということは、その最初のときにはもう既にその事柄について知識があったはずであり、ゆえに、本当の最初はその時点よりも更に昔であったに違いないという理屈がそれである。では、その本当の最初はいつだったのかと言えば、分からない。ただ、分かる時点よりも前のことであったに違いないとしか言えない。すると、話はどうしても曖昧になってしまう。「提供」について初めて聞いたのはいつだったのかについても、キャシーは、確かなことは言えない。漠然と、それは6、7歳のときだったのではないかという気がするが、それには、学年が上がって保護官から正式に教わる頃には、聞いても驚かず、「以前どこかで聞いた気」(p.129)がしたからという程度の根拠しかない。驚かなかったということは、それ以前に既にどこかで聞いていたということであろう、と。

キャシーの記憶の文脈におけるかぎりでは、それは、展示館の場合と同じパターンを示している。しかし、提供とは、クローン人間教育機関としてのヘールシャムが、腐心をして扱わなければならない話題であったはずである。同じ事柄に関心を持っていたトミーが言うことには、キャシーはそれは「陰謀説」(p.129)のようだと言って受けつけていないが、提供についてだけにかぎらず、生徒たちの記憶のありかた一般にヘールシャ

ムの教育が与えた影響という観点からすると、極めて重要な洞察があるように思われる。

「何をいつ教えるかって、全部計算されてたんじゃないかな。保護官がさ、ヘルシャムでのおれたちの成長をじっと見てて、何か新しいことを教えるときは、ほんとに理解できるようになる少し前に教えるんだよ。だから、当然、理解はできないんだけど、できないなりに少しは頭に残るだろ？ その連続でさ、きつと、おれたちの頭には、自分でもよく考えてみたことがない情報がいっぱい詰まっていたんだよ」(p.129)

生徒たちにとってまっとうな理解が可能になる以前に、学習すべき事柄を強引に彼らに与えておく。そういう地ならしをしておけば、それがどれほどショッキングな事柄であっても、後で正式に教えるときには、生徒たちは驚かず学習する。洗脳に近い教育法ではあるが、おそらく、ヘルシャムはそのような方針の下に教育を施していた。それが洗脳に近いことじたいを問題にしたくもなるが、ここでは、そちらの方向での考察は行わない。その代わりにここで確認しておきたいのは、この教育法においては、生徒たちがある事柄を学習するときに、その「始まり」が曖昧になるということである。後から振り返れば、確かに、ある事柄を教わった。しかし、それをいつ最初に教わったのか思い出そうとしても、分からない。生徒たちの後の記憶がそのようなかたちになってしまうことのほうが、今ここでは重要である。もちろん、そのようなしかたで教育を施すことで、ヘルシャムは、生徒たちに、彼らにとって最も大きな起源についての問題、彼らの出生の問題に関して、突っ込んだ探究をしても意味はないという態度を植えつけることに成功する。キャシーがルースのポシブルさがしに冷めた目線を向けるのは、そのような人間を見つけることなど統計的に不可能であるからではなく、起源さがしへの関心がそもそも彼女にはないからであ

る。

起源の曖昧さは、キャシーにとっては、悩ましいことではない。確かに、彼女は、自分の性欲の強さを気にして、その理由は自分の「親」がポルノ雑誌のモデルか何かであったからではないかと考え、コテージに出回っていたポルノ雑誌にこっそりと目を通すということをしてはいた。しかし、そうするときの彼女の目的は、自分の起源を見つけることにはなく、今の自分のありかたへの説明を、こじつけでも良いので、見つけることのようにあった。トミーも同じ姿勢であるのだが、キャシーには、自分のポシブルを見つけ出すことに特別な意味があるという意識はない。そう考えて良い根拠として、彼女が、自分の物語を構成する上で、起源の曖昧さを好んで活用していることを挙げるができる。自分がトミーの介護人になる決断を初めて明確にしたのは、キャシーによれば、ルースの死の床においてであったが、そこで彼女はこう言っている。

……でも、二人の視線が結び合ったあのとき、あの数秒間、わたしにルースの表情が読めたように、ルースもわたしの思いを正確に読み取ってくれたと思います。そう願っています。その一瞬はたちまち過ぎ去り、ルースも遠くへ去りました。もちろん、ほんとうのところはわかりません。でも、ルースはきっと理解してくれたと思います。

あの瞬間に理解できたかどうかは、実は問題ではないのかもしれませんが。たぶん、ルースは最初から知っていたでしょう。いずれわたしがトミーの介護人になり、あの日、車の中でルースが言ったとおりに「挑戦してみる」はずであることを。(p. 361)

キャシーが言っていることを額面どおりに受け取るならば、このくだりは美談となる。ルースがトミーと一緒に果たすことができなかつた夢を、親友キャシーが彼女に代わって実現しようと決意したのだ、と。しかし、そういう読みかたは、第一の物語においては有効であっても、第二の物語に

おいては意味をなさない。「あの日、車の中」とは、キャシーが数年ぶりにトミーと再会し、彼との絆を見せつけるというかたちで、ルースに対して残酷なまでの復讐を果たした場面である。そこで、キャシーは、ルースに対して、彼女の遺志を継ぐという趣旨のことなど、まったく言っていなかった。泣きじゃくり、何か感極まってはいたものの、ルースに対して、自分がトミーと一緒に将来何をするかについては、キャシーは、その場面では、何も言っていなかった。第二の物語は、ルースとキャシーの敵対関係をベースにしている。そちらの観点から上のキャシーの言葉を読み直してみると、別のことが見えてくる。キャシーの「たぶん、ルースは最初から知っていたでしょう」という言葉には、根拠がない。ルースがそのようなことを最初から知っていたと考えられる材料は、極めて乏しい。ルースは、最期の最期まで、殊に案件がトミーであるかぎり、キャシーを信用してなどいなかった。

何を根拠に、では、キャシーは、このような大胆な発言を、こともあろうに、ルースの死の床で、独り言でしているのであろうか。その問いへの答えの鍵は、「最初から」という彼女の言葉遣いにある。端的に、彼女の物語においては、ヘルシヤムにおいてと同じく、「最初」という時は、原理原則、特定できないので、そのことをキャシーは活用するのである。上に指摘した、ジェラルディン先生の親衛隊においてルースが隊長としての権威を維持していた特殊なしかたを思い出しておきたい。「以前」を仄めかしさえすれば、彼女は、権威を維持できたのであった。それと同じことを、ここでは、キャシーはやっている。彼女が言うところの「最初」とは、いつのことなのだから、実は、まるで分からない。しかし、「最初」に言及することで、キャシーは、うまく第一の物語を構成している。キャシーが起源の曖昧さを活用しているというのは、例えば、そういうことである。補足をこのくだりについてしておくならば、キャシーは、おそらく、自分はルースの遺志を継ぐ意思があるということをルースに伝えるつもりなどまったくなかったという憶測は、有効である。ルースの死が実現した

からこそ、ここで、好き放題言っているだけだとも読めるのである。だとすれば、「あの瞬間に理解できたかどうかは、実は問題ではないのかもしれませんが」という言辞は、キャシーが「親友」への復讐を隠蔽するために使っている、巧妙な言葉の綾だということになる。

起源、始まりが、組織的に曖昧にされているとするならば⁽⁶⁾、物語の語り手は、「最初」をどこにでも恣意的に設定できるという自由を得ることになる。キャシーが自分の物語を、第一の物語のレベルにおいて筋がとおったものに仕立て上げることができる最大の理由は、彼女がその自由を活用しているという点に求めることができる。彼女とトミーとの二人だけの物語は、いったいにいつ始まったのか。答えは、ルースが死んだときからなのだが、キャシーは、読者がそう読んでしまうことを回避しようとする。それに先立つ遙か以前から、二人のあいだには愛があったということにしておかなければ、第一の物語は成立しない。ルースが邪魔をしに二人のあいだに入って来る以前から、キャシーとトミーのあいだには、ルースごときには傷つけることができない絆があったということにしておかなければならない。物事の起源は必ず曖昧であるのであって、そのことをキャシーは活用し、自分とトミーの愛の起源を捏造しているとさえ、言えるのである。

そのような捏造は、時間が未来へ向けてではなく過去へ向けて伸びるような感覚を生むという効果を持つ。始まりは曖昧であるので、それはどこまで戻っても到達できないほど遠い過去にあるような錯覚さえ生じる。人生が、未来の方向で閉ざされてしまっているのであれば、過去の方向に伸ばせば良い。上で指摘を既にしたキャシーの時間観、クローン人間の人生の短さは、絶対的ではなく、物語行為によって伸縮できるという考えかたを、キャシーは、起源を捏造するという技法によって、見事に実践しているのである。この技法において、キャシーは、未来の到来を遅らせるということもしているということを確認しておこう。過去が曖昧であればあるほど、未来は幻影性を増すからである。その意味では、この技法は、未来

の到来そのものをごっそりとまとめて「先送り」する技法だとも言える。

次に、上で既に指摘した、二つの事柄を「ないませ」にして語るという技法について、更に考察しておく。ある重要な案件に読者の注意をまず引きつけておいて、そこに別の案件を「こっそり」忍び込ませることで、後者を抵抗感なく読者に読ませてしまうという技法である。教育の場で使われるならば、この技法は洗脳の効果的なテクニックだと言えるが、キャシーの語りにおいてはどのような効果を狙って使われているだろうか。個別の場面においては、それじたい重要であり、語り手としては伝えなければならぬのだが、正面から提示してしまえば読者が抵抗感をおぼえるような事柄を、衝撃度を下げてさり気なく読者に知らせる効果がある。また、こっそりと伝えられた事柄の重要性に読者は後になって気がつくように仕掛けられていることが多く、その場合には、物語展開の「遅延」、あるいは「先送り」の効果もあると言える。そのような効果を狙ってキャシーはこの技法を多くの場面で使っているが、ここでは、物語全体の構成に関わるかたちで大規模に、この技法をキャシーが使っている様子を見ておく。キャシーが、二つの物語をないませにして、あたかも一つの物語だけをしているかのように見せかけようとしていることは、上で見たとおりである。第一の物語に、こっそりと第二の物語を忍び込ませるというしかたで、そのことについて更に考えてみると、第一の物語は「おとぎ話」的性格が強く、第二の物語は「心理リアリズム」的性格が強いことに気がつく。そして、その違いは、キャシーの物語における、彼女が語る場所のクローン人間たちが生きる「閉じた」世界と、外の「現実」の世界との違いと、どこかしら似てはいないだろうか。ここでは、一つの類似点だけを指摘しておく。キャシーが二つの項目をないませにするしかたが似ているのである。

読者を、キャシーは、物語の冒頭から、クローン人間たちの世界、ヘルシヤムという外界から遮断された閉じた世界に引き込み、ヘルシヤム以後も、物語構成力を駆使して、自分が見たところのクローン人間世界を

作り上げ、読者をそこに留め置こうとする。それは、あくまでも、キャシーが作り上げている「物語世界」にすぎないのだが、彼女は、視点を一貫してその内部にとり、外部世界の視点は排除することにより、内部整合性が高く自己完結している世界にそれを仕立て上げているのであって、そこには独自の現実味がある。その内部で自分が育ったところの世界の現実味を疑うことを一貫して拒否するというキャシーの姿勢が、彼女の物語の現実味を説得力あるものにしてている。しかし、キャシーは、自分たちクローン人間をそもそも作り出した外部の世界について語っていないわけではない。彼女の物語には、外部の世界のありかたへの直接の言及は、確かに、ほとんどない。だが、キャシーは、介護人として11年以上も働き、国中を車で走り回ってきているわけで、外部の世界について知識がないわけではない。物語の中で言うてはいないだけで、実際には、キャシーは、外の世界について事実レベルではそれなりの知識を持っているはずである⁽⁷⁾。自分が作っている物語世界とは関係がないこと、あるいはそれと矛盾するようなことは、ただ語っていないだけなのではないか。マダムとエミリ先生の口を借りてではあるが、外の世界ではどういう経緯でクローン人間を製造するようになったのか、そして、クローン人間は総じてどういう扱いを受けてきたのかなどについての話を、彼女は、自分の物語に取り込んでいる。なので、結果的に、読者は、外の世界のありかたについても知らされることになる。

キャシーは、外の世界は排除できるという物語と、それは排除できないという物語の両方を語っていると考えるべきではなからうか。クローン人間たちが生きる世界とその外部にある世界の関係をどう捉えるかのレベルで、彼女は二つの物語をしているのではないか、ということである。それだけではない。前者の物語は、後者の物語の存在に、根本的なところで依拠しているのではあるまいか。キャシーの巧みな語り口に騙されてしまい、読者がつい忘れてしまいがちなことを確認しておこう。クローン人間とは、詰まるところ、「複製」、「コピー」なのである。「オリジナル」がな

ければ、そもそも存在しないような存在なのだ。そのことにキャシーは、ほぼ間違いなく、気がついている。だから、語り手としての座を、一時的にとは言え長々と、物語の終盤、エミリ先生に譲っているのである。そこでは、外の世界の「声」が、直にキャシーの物語世界に侵入して来ている。キャシーとトミーがマダムに会いに行く場面は、実は、キャシーが語るこれら二つの物語がそこでは臨界しているという意味でもまた、重要である。物語を誰がどうするかという案件で、キャシーは興味深いことを言う。

わたしの説明は、最初、しどろもどろだったと思います。でも、しばらくしゃべるうち、最後まで聞いてもらえそうだという自信が湧いてきて、落ち着いて話せるようになりました。それまでの数週間、わたしは何をどう言おうか、繰り返し考えてきました。車で移動するときも、サービスエリアの静かな喫茶室にすわっているときも、何度も心の中で復習していました。でも、話すのはとても難しいことのように思えました。そこで、一つの計画を立てて臨むことにしました。中心となるセンテンスをいくつか作り、それを完璧に暗記しておくのです。あとは、センテンスからセンテンスへの移り方を地図のように作っておけば済みます。ところが、いざマダムを目の前にしてみると、わたしのやってきた準備の大半は、不必要か見当違いのように思われました。(p. 384)

猶予についてどのように伺いを立てるか、自分とトミーの間柄をどう説明するかなどについて、キャシーは周到な準備をしてきていた。しかし、彼女は、準備をしてきたとおりには行動していない。しかも、マダムに対して何を自分は言ったのかについては、読者に対して、簡略版の説明だけで済ませている。要するに、緻密に自分の物語を構成する語り手キャシーは、ここでは姿を消してしまっているのである。注意深く準備をし、リハーサルをしてきた「物語」を、キャシーはしない。理由は、そのときのマダム

が、「……最近数年間に会った誰よりも親しく、誰よりも近い人のように思えた」(pp. 384-85) からだとキャシーは言うが、物語の語り手としては、それは言い訳にすぎないとの謗りを受けてもしかたがない。

準備をしてきた自分の「物語」を放棄して、おそらくだが、「愛」が云々とでも思いつくままに口走ってしまったのだろう。その点を、マダムに、逆に突かれてしまう。

「それに、もしほんとうだとしても、マダムはもううんざりしておいででしょう。いろんなカップルが来て、愛し合っていると申し立てるわけですから。トミーとわたしにしても、愛し合っているという確信がなければ、ここにうかがっていません」

「確信ですか」長い間黙って聞いていたマダムが、突然、そう口を開き、わたしたちはびくっとしました。「確信と言いましたね。愛し合っている確信がある。どうしてそうわかります。愛はそんなに簡単なものですか。二人は愛し合っている。深く愛し合っている。そういうことですか」(p. 385)

これまで、キャシーは、愛というテーマについて、様々な語りの技巧を凝らしつつ、非常に複雑な描きかたをしてきた。自分のトミーへの愛は、複雑な構成の物語のかたちでしか描けないものだとの思いがおそらくあり、それをこれまでは緻密に実践してきた。ところが、ここで、キャシーは、「確信」などという簡単な表現に訴えてしまう。端的に、キャシーは、この場面で、マダムを自分の物語に取り込むことができなくなってしまっている。そして、そうであるということ、さり気なく自白している。

エミリ先生とマダムとの面会の場面で、語り手としてのキャシーの「権威」は揺らぎつつある。語り手としての座を、外部の人間に明け渡してしまっているのだから。しかし、そうすることには最終的に必然性があるということをも、キャシーは、おそらく、理解している。クローン人間の世

界をクローン人間の視点だけから語るだけであれば、自分の物語が説得力を欠くものになってしまうということに、彼女は、おそらく、気がついていて、キャシーが書いた『わたしを離さないで』という書は、訴えの書でもある。読者が、彼女が想定している提供を待つ他のクローン人間であろうが、「我々」であろうが、そのことに変わりはない。その訴えを表現するためには、彼女は、どうしても、外の世界という広い文脈において、自分たちクローン人間が相対的にどういう位置にあるのかを、読者に知らせておかなければならない。その必要のために、それまでは完全にキャシーが統制を効かせてきた物語が、ここで一時的に破綻する。一見したところ自己完結した世界を描いているかに見えるキャシーの物語は、その意味では、自己完結していない。しかし、それが自己完結してしまったのではまずいという意識も、キャシーにはある。自分が描く世界は、詰まるところ、その世界の外部の何者かが作り出した世界にすぎないということを、キャシーは知っている。キャシーの物語は、その外部の枠組みがあって、初めて成立するのであって、みずからの存立をみずからの力だけで裏づけることはできない。それに対して相対的に外在し、先行する世界がまずあって初めて成立する物語で自分の物語はあることを、キャシーは十分に心得た上で、物語をまとめ上げている。

しかし、そのような認識は、読者には、作品読了後、遅れて訪れるのではなかろうか。キャシーが描き出す、極少数の特権的なクローン人間たちの、悲しくはあるが牧歌的に美しくもある世界から、その外部に暗く広がる世界へと思いが向かうのには、いくらかの時間が必要なはずである。それは、麻酔の効果が、徐々に、ゆっくりと薄れていく過程に似ていないこともない。そして、そのような遅れ、読者が体験する遅れは、物語の語り手としてのキャシーが希求したものではなかろうか。複製された存在が生きる時間は不当に短い。複製の目的じたいが厳然とその短さの必然性を規定している。自らの「使命の終わり」を視野に入れながら筆を置くとき、キャシーが願うのは、自分の物語が可能なかぎりの遅延をもって読まれる

ことではなかろうか。自分の人生をすべて自分が語る物語に託し、それが、物語としてで良いので、いくらかでも長く続くことではなかろうか。

注

- (1) 英語原題は *Never Let Me Go*。本稿執筆にあたり使用した原書は 2005 年刊の Faber and Faber 版。
- (2) 原典 *Never Let Me Go* からの引用には、以下すべて、土屋政雄訳（早川書房、2008 年）を使用することとする。付する頁数も同版に準じる。
- (3) 自己顕示欲ばかりが先行するルースが、総じて他の生徒たちから馬鹿にされていたトミーをカップルの相手に選んだ理由は、説明するのが難しい。天真爛漫であるなど、トミーが持っているポジティブな資質に対して、ルースは、キャシーとは比べものにならないほどに疎いし、また、彼女は、彼の不器用さを無神経にも馬鹿にし続ける。このことを説明するためには、模倣欲望理論を援用するのが適切だと思われる。すると、ルースは、キャシーのトミーへの「欲望」を欲望し、結果的にキャシーの欲望を「模倣」したということになる。模倣欲望理論については、その草分けとなった René Girard の *Deceit, Desire, and the Novel: Self and Other in Literary Structure* を参照されたい。
- (4) キャシーは本当に自分に与えられた運命に不条理を感じていないのかどうかは、議論を呼ぶ論点である。John Mullan によれば、イシグロがこの作品で行っている文学的「実験」は、キャシーが自分の運命の不条理を理解する能力を欠いていることは“axiomatic”（公理的）であるとするものの上に成り立っている（John Mullan, “On First Reading *Never Let Me Go*,” p. 105）。キャシーの頭はそのようにできているということ、証明抜きで無条件に受け容れることによって初めて、この作品の価値を、イシグロが狙ったしかたで、読者は評価できるということである。そのような、それこそ不条理を、読者は受け容れるべきか、あるいは受け容れることができるかというような問いは、Mullan の議論では、「公理」という言葉の「実験」的な使用により、封じられている。それは、一見、強引な読みのように思われるが、キャシーが置かれている状況との整合性は極めて高い、卓見である。「我々」読者には、キャシーのクローンとしての存在のありかたなど、経験的には、定義上、理解不能である。しかしながら、いやしくも彼女の物語をいくらかでも理解しようとするならば、経験を度外視して、

無条件で受け容れなければならない何かがある。その「何か」が何であるかを詮索することは、無為である。イシグロが読者に対して実験的につけている注文が、それほどまでに不条理であることを見抜いているあたりが、Mullan の議論の真価である。キャシーが生きる不条理な世界を理解するためには、「我々」読者の側も不条理な読みかたをしなければならない。要するに、Mullan は、条理の相対性とその意味を読者に考えさせることが、イシグロのこの作品の意義の重要な一角と考えているのである。それは、特定の政治、社会や文化に参照することをしない読みかたであり、そのような項目は総じて舞台道具としてしか用いることをしない作家でイシグロはあるということを読み出すと、その意味でも整合性が高い読みかたであると言える。

- (5) 皮肉ではあるが、そのように開かれている過去を持つ特権は、特にキャシーのようなクローン人間にあるというのは、言えることである。クローン人間の過去は曖昧だからである。Mullan もそのことを、上記の論考で指摘している (John Mullan, p. 110)。
- (6) このことは、イシグロの、自分の文学の「起源」が日本や長崎にトレースされることへの反発でもあるように思われる。作品の「起源」としての「著者」をさがすことじたいの意味が、疑問に付されているとさえ考えることができる。これまでのどの作品にもまして、イシグロは、この作品で、文学作品のそれも含めて「起源」の曖昧さにこだわっているのであって、伝記的な評論は的外れだと言わざるをえない。それも、イシグロがこの作品において試みている文学的実験の一つなのであって、作家の出自に言及することは、即ち、この作品の価値の大事な一部を見逃すことに等しい。
- (7) 「事実レヴェルでは」という言葉を強調しておく。外の世界についてある程度の知識は持っていることに間違いはないが、問題は、吸収した知識をキャシーがどのように理解したかである。情報としては吸収したが、彼女はその理解をいかなるかたちでも拒んだという解釈は、有効である。あるいは、拒んだというよりもできなかったという解釈も、有効である。このことに関して鍵となるのは、キャシーが外の世界の現実にどれだけ触れることができたかではなく、彼女の頭のありかたのほうである。上記の論考で Mullan は、イシグロの作品構想のありかたに依拠して、キャシーは外界については完全に無知であったと論じているが、別の角度から同様の結論を導いている優れた論考として、Mark Currie の論文を挙げておく

(Mark Currie, "Controlling Time: *Never Let Me Go*"). Currie は、心理学的なアプローチをとり、外の世界から遮蔽されており、物質的にも困窮を課する特定のタイプの特権的な施設で教育を受けた子供たちは、卒業後、外の世界に出てからも、自分たちの頭に浸透しきった特権意識のために、外界のありかたを理解しないと論じる。(Currieによれば、イギリスのパブリック・スクールはそのような施設の一例である。)しかし、Mullan や Currie が言うところのキャシーの無知とは、彼女には外の世界のありかたそのものに関して著しく知識が欠如しているということではなく、ある程度の知識はあっても、それがクローン人間としての自分にとって何を意味するかを理解する能力を彼女は欠いているという意味である。

文献

Kazuo Ishiguro, *Never Let Me Go*, London: Faber and Faber, 2005

カズオ・イシグロ、土屋政雄訳『わたしを離さないで』、ハヤカワ epi 文庫、早川書房、2008

René Girard, *Deceit, Desire, and the Novel: Self and Other in Literary Structure*, trans. Yvonne Freccero, Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1966

John Mullan, "On First Reading *Never Let Me Go*," eds. Sean Matthews, Sebastian Groes, *Kazuo Ishiguro*, London and New York: Continuum, 2009

Mark Currie, "Controlling Time: *Never Let Me Go*," eds. Sean Matthews, Sebastian Groes, *Kazuo Ishiguro*